

宮迫千鶴

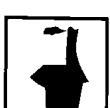
本音の
コラム





本音のコラム

宮迫千鶴



本音のコラム

一九九二年五月二三日 初版印刷
一九九二年五月二八日 初版発行

著 者 宮迫千鶴

装丁・本文装画 宮迫千鶴

本文デザイン 江口称弘

+ T・break

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 〇三―三四〇四―二〇一 (営業)
〇三―三四〇四―八六一 (編集)

振替口座 (東京) 〇一〇八〇二

印刷 三松堂印刷株式会社

製 本 小高製本工業株式会社

©1992 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はおとりかえします

ISBN4-309-00760-0

宮迫千鶴 (みやさこちづる)

画家・評論家・エッセイスト。

一九四七年、広島県生まれ。

広島県立女子大学卒業。美術活動のかたわら、写真論や美術論をはじめ、女性問題や家族論など多岐にわたるエッセイや評論活動を展開する。

おもな著書に『超少女へ』(集英社文庫)、『サボテン家族論』(河出書房新社)、『ハイブリッドな子供たち』(河出文庫)、『ママハハ物語』(ちくま文庫)、『ごはんの風景』(筑摩書房)、『母という経験』(平凡社)、『緑の午後』(東京書籍) などがある。

1988年 5			目次
	1989年 79		
		1990年 155	
あとがき 267			1991年 237

本音のコラム

* 「本音のコラム」は『東京新聞』に連載
(昭和63年2月6日〜平成3年4月27日)さ
れました。インデックスは巻末にあります。

1988



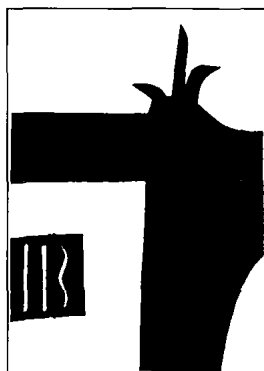
2月

FEBRUARY

死は耐えられるが苦痛は耐えられない

先日、NHKテレビで放送された『クローズアップ「がんの痛みを消せ」』を見て、うれしくなってしまった。私は知らなかったのだが、一九八二年に世界保健機関（WHO）は「がん疼痛救済計画」を策定していて、今世紀中に世界中のすべてのがん患者を痛みから解放することを目指しているというのだから、私などは大感激、大賛成である。

番組ではこの方式を取り入れた埼玉県立がんセンターの鎮痛方法が紹介され、実際にその方法で疼痛から解放されている患者さんの「健康に近い状態」の、そういつていいなら明るい病氣生活が紹介されていた。



なにしろこの公害列島に住み、添加物の多い食べ物を食べ、おまけにチェルノブイリ事故で代表される放射線汚染にさらされて生きている以上、がんにならないで死ぬことのほうがめずらしいような気もする昨今である。

がんは怖い。しかし私はそれ以上に怖いものがある。有名人のがん死のたびに新聞や週刊誌の見出しに登場する「壮絶な闘い」という言葉が怖いのである。

新聞や週刊誌というのはまだまだ男性原理的なところがあるから、そうなるのかもしれないが、病気になって体が痛んで悲しい気持ちになっているのに、なんで壮絶に闘わねばならないのか、と思うのである。病気になってまで雄々しくなんていうのはつらい。

がんの恐怖。それは「死に至る病」であることもさることながら、苦痛の激しさにある。私たちは死には耐えられるが、苦痛には耐えられないのだ。それゆえがんを恐れる。

しかし、その苦痛が鎮められるなんて、なんて素晴らしいことか。鎮痛剤としてはアスピリンから始まりモルヒネまでと細かく紹介されていた。ちなみにモルヒネはきれいなケシの花からつくられる。自然はなんてやさしいのだろう。全国の病院で、一日も早く、この鎮痛方式を採用してほしい。

原発は国民投票で決めよう

大学四年の時、教職免許を取得するために、教生としての授業をした。私は国文科だったの

で、国語のうち現代国語を担当した。しかし私は授業実習をするのがユーウツだった。なにしろ与えられたテーマが「原子力の平和利用」というものだった。

私は広島で生まれ育ち、これから教える生徒たちも広島で生まれ育っている。そして私たち広島人間は、日ごろとりたてて口に出さなくても原子爆弾に痛めつけられていて「原子力の平和利用」なんていわれてもキレイごとにしかならないくらい、ヒロシマ的懷疑を抱いているところがある。

悩んだ末に、私は文部省の指導要領をほとんど無視して、大江健三郎さんの『ヒロシマ・ノート』の紹介をした。そして、とってつけたように「平和利用」すれば原子力は巨大な力を持つ（そうです）とつけ加えた。指導要領ではそういうようにいわれていたからである。

しかしそういいながらひどくうすら寒い気がした。数日後、ある女生徒が作文の末尾に書いてよこした。

「父はいまでも原爆症で苦しんでいます。その父のことを思うと平和利用なんてウソとしか思えません」

教員室の片隅でその作文を読んだ私はからだ全体が赤面する思いだった。そしてむしろ悲しくなってしまう。そして、

「あなたは若いから敏感なんですわねえ」——老練女教師が私にいった。多分、私を慰めてくれたのだろうが、若かった私には、その老練ぶりが不潔な鈍感さに思えてうんざりした。

それから約二十年、「平和利用」の最たるものとして登場した原子力発電を、私たちは持てあましては始めている。なにしろいまや電力は余っているのだ。一歩まちがえれば「平和利用」

は放射能の修羅場と化す。欧米の人々も原発はいらないと言い始め、イタリアは国民投票で原発を決めた。(カッコイイ!) 私たち日本人も国民投票をしようではないか。

女だって凶悪犯罪をしますよ

富山地裁で判決の出た連続女性誘拐殺人事件の裁判経緯を見ると、私たちの抱く固定観念がいかにものごとを曇らせるかがよくわかる。私がまず驚いたのは、検察側が最初に、この種の犯行は「女ひとりでするはずはない」という固定観念から、事件を解釈していたことだ。この固定観念の裏にある女性観は、女は弱いものとはまではないかなくとも、犯罪においても主体性を発揮するのは男で、女はそれにひきずられるものというようなくとも、犯罪においても女性観がみえる。どうしてこの時代になってもまだ、この種の女性観が横行してるのか不思議である。

またこの事件ではもうひとつ「男としての責任」という、これまたなんとも古めかしい男性観もみえた。これも不思議だ。

だいたいこの社会は、男だ女だと二分化しすぎる。男にも女にも実にさまざまなタイプの人間がいる。それなのに男としてとか女としてとかいう単純すぎる二つの枠組みに押しこめるからややこしくなるのだ。

女だって凶悪犯罪をしますよ。心やさしい女もいれば、手のつけられない性悪女もいる。天

使のような女もいれば、悪魔のような女もいる。それだけのことなのにどうしてわからないんだらう。ほんとに不思議だ。

「男として」とか「女というものは」というのは、おおむね固定観念である。それに、ことから「男としての責任」という必要はない。「人間としての責任」といえば十分ではないか。むしろ、女だって立派に「人間としての責任」はとれる。責任に性差はない。

今や必ずしも男が強者で女が弱者という時代ではない。男だ女だという性差よりも、人格やキャラクターの個人差のほうが大きい時代である。それゆえ古い尺度で新しい事件をとらえると過ちをおかしかねない。犯罪者を裁く立場の人が古い固定観念に縛られていると判断もゆがんでしまう。もっと幅広い人間観を持つてほしいものだ。

夫婦のお喋りが不思議がられるとは

ある取材で「落ち込んだ時にどうしますか」と尋ねられたことがある。「そういう時は夫を相手にめいっぱい喋ります」と答えたら、取材者は不思議そうな顔で「夫婦で喋るんですか?」と言う。今度は私のほうが不思議になった。どうして夫婦で喋ることがそんなに不思議なんだろうか。その取材者（男性）は言う。「ウチなんかほとんど喋りませんからね」

もちろん、ほとんど喋らなくても、それなりにうまくいっているのなら、夫婦のことなんて他人が口を出すものではない。だが片方が落ち込んでいる時に、それを知らないでいる夫婦と

いうのはたして仲良しなんだろうか。

しかし、周囲の夫婦を眺めていると、おたがいよく喋る夫婦のほうが少ないようだ。その結果、それぞれ「夫としての悩み」とか、「妻としての悩み」を抱えこんでいる。なんだかとても変な気がする。

わが家の場合は、実によく喋る。もちろん、落ち込みや愚痴ばかりを言っているのではない。その日の出来事や体験、面白かったことや腹がたったこと、感動したことをたがいに報告しあう。それはもう、朝、顔を洗ったりするのと同じような日常習慣になっている。

それにしても多くの夫婦はどうして毎日の会話が少ないのだろうか。性別役割分業（夫は会社、妻は家庭）の結果、話題に共通性がないのだろうか。かりにそうだとすると、ではなぜ共通する世界を広げたりしないのだろうか。

先日、ある社長さんに会ったら次のように言っておられた。「六十代になって体をこわしたのがきっかけで、家に早く帰るようになってはじめて女房と会話するようになりましたよ」

そうか、企業戦士と銃後の妻とはそういうものか、と私は妙にしみじみとしてしまった。何かさびしい。他人事ながら、せつない。夫も妻もそれぞれの役割の中に閉じこもり、夫婦であることの楽しさを知らないで生きるなんて。

3月

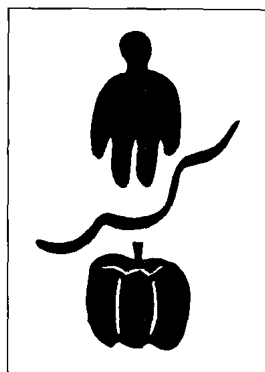
MARCH

年齢を隠す背景には文化の未熟さがある

近ごろふたたび、年齢を公表しない女性の作家や評論家がふえている。本の奥付けを見ても生年がふせてあるのだ。どうやらまたぞろ「女臭い」態度が復活しているらしい。

なぜ年齢を隠すのか。考えられる理由は、ひたすら若く見られたいという意識だろう。あるいは自分の仕事は年齢を超越した普遍性を持つているとでもいいたいのだろうか。

ひたすら若く見られたいというのは、いうまでもなく、男に「いい女」と見られたいという一種の媚態である。なにしろ、女性の社会進出がふえたとはいえ、まだまだこの社会は男性によって支配されていて、そういう男性優位社会で、いい地位を占めようと思えば媚態も役に立



つのかもしいない。個人の自由という点からいえば、もちろん、媚態をふりまきたい女はふりまけばよい。

しかし私が残念だと思うのは、女たちがひたすら若さに固執しなければならぬ背景には、この国の文化の未熟さがあるということだ。逆にいえば、この国の文化はいつのまにか、成熟ということの意味を忘れてしまっているのである。

本を読むということは、書いた人の考え方と対話することだ。納得する時はいいが、疑問に思うことも必ずある。そういう時にはこの作者は、あるいはこの評論家は何歳なんだろうかと知りたくなる。というのはいまや価値観の多様化時代といわれるように、年齢や立場によって同じ言葉もその意味がかわるようなところもある。そのためにも年齢には深い意味がある。

若さというのは年齢ではない。精神の豊かさがあつてはじめて若々しく生きていられる。そして精神の豊かさというものこそ、年齢を重ねてはじめて身につくのである。たかが数字としての年齢にこだわるなどいいたくなる。

石垣綾子さんを見よ、宇野千代さんを見よ。成熟とはかくも豊かなことである。ちなみに私は不惑である。文句あるかな？

オープンな米大統領選がうらやましい

アメリカの大統領選がスタートすると、私は日本人であることをやめたくなる。有権者と大

統領候補者の間にあるあのオープンなやりとり。さっきテレビをつけたら、史上初の民主党の黒人候補ジャクソン氏の遊説中の光景が報道されていたが、支持者たちがみせるリズムミカルなジャクソン支持のジェスチャーには驚かされた。

とにかく明るい。「ジャクソンがいい」と叫びながら踊り出しそうである。つまり、有権者ひとりひとりが、大統領選にノッている。とりわけテレビ・インタビュに答えている黒人有権者たちのなんとも誇らしげな表情。

どこかの国の首相選出と比べると、明暗の差がはなはだしい。それゆえ、日本人であることをやめたくなくなってしまふ。

大統領選はアメリカの国民にとっては、神聖にして重大な政治参加行為ではあるが、同時に盛大なるフェスティバルのようにもみえる。いつてみれば祭政一致であり、国民ひとりひとりが、有権者であることの尊さを楽しむのだ。

どこかの国の首相選出なんて、有権者に関係ないもんね。いつのまにか、わけのわからないうちに、ごたごたと何かがあつて「このひとがそうです」と知らされて、それで終わり。好きじゃないオジさんだなあ、つまんないなあ、と思つても、どうにもならない。つくづく日本がいやになるだけである。

アメリカ人のように「ジャクソンがいい」と叫んで踊つて、大統領選出ということを経験することとして感じることできたら、ずいぶん和我々の政治感覚もビビッドになるだろう。支持合戦をして到達した民主的多数決であるなら納得もいく。ホントにうらやましい。

とはいえ、大統領候補者がよくみせる、いわゆるショーアップ的な派手なふるまいには時々